

# スノースポーツの普及度と課題

## ～長野県車山高原スキー場と Mt. 乗鞍スノーリゾートの比較を通して～

生涯スポーツゼミナール 1313037 塩田 雅章

### 1. 研究動機・研究目的

スノースポーツは日本のみならず、世界においても冬のレジャーの代表格である。しかし近年、その客足に鈍りが出てきている。その原因として、現在日本に訪れている不況や東日本大震災といった天災、また地球温暖化による雪不足等の様々な外的要因が影響しているだろう。不況により、消費者の生活は苦しいものとなり、それに比例するようにレジャーにかけるお金も減少してきている。また、近年は雪不足に悩まされ、スキー場の営業期間も短くなっているのが現状である。実際に、通常ゴールデンウィーク頃まで営業しているスキー場が、2015～2016年シーズンは3月をもって営業を終了しているケースが少なくない。これでは消費者側の予定が狂わされてしまい、行きたかったのに行けなかったという人々も存在しているのではないだろうか。このように、様々な要因によって、冬のレジャーとして代表的なスノースポーツに大きな影響が出ている。

日本は狭い国土ながら世界で2番目に多いスキー場を保有しているため、他国に比べると、スキー文化が深く根付いていることが分かる。これだけ存在するスノーリゾート施設を再び賑わせることは出来ないのだろうか。そこで私はこの状況について、何か一石を投じることが出来ないかと考え、本研究に着手することを決めたのである。

### 2. 研究方法

本研究では長野県の2つのスキー場である、車山高原スキー場と Mt. 乗鞍スノーリゾートをモデルスキー場に設定し、スノースポーツ実施人口の減少の要因を明らかにするとともに、実際にスキー場利用客にアンケートを実施し、ニーズを明らかにしていく。具体的には、個人的属性、実施競技、スキー場に対する評価、ニーズの項目を設定し、質問紙調査の形をとる。また経営者側からのインタビュー調査も行い、近年の利用客数の推移や新たな経営戦略、今後必要なことを聞いていく。本研究に着手することによって、スキー場利用客の潜在ニーズや経営現状を明らかにすることができ、スキー場の更なる発展に貢献することができるだろう。スキー場の発展はスキー場のみではなく、地域への経済効果も非常に大きいであろう。本研究によって、降雪山間地域への経済効果も支援することが可能になってくるであろう。

### 3. 主な結果と考察

来場者の年代については、車山高原スキー場では10代、20代の若年層が全体のおよそ4分の3の78%を占め、次いで40代の13%、50代の6%、30代の3%となり、60代以上のシニア層の来場者は散見出来なかった。Mt. 乗鞍スノーリゾートでも、若年層がおよそ半数を占めている。どちらも若年層が多いことについて、雪マジに対応していることが挙げられる。19歳はリフト無料、20歳は半額という工夫が顕著に表れた結果だろう。

経験年数についても差がみられた。10代や20代といった若年層の利用者が多い車山高原スキー場では、スキーまたはスノーボードを始めて、1～5年の言わば初心者層が68%を占めていた。これは大学や専門学校に新たに入学するタイミングで始める人が多いということを表しているだろう。また雪マジの影響も大きく、冬にスキー場へ行くということも、若者の間では選択肢の1つとなってきたのではないかと。次いで、6～15年と16～30年が16%となっていて、31年以上の経験者はいなかった。一方のMt.乗鞍スノーリゾートでは、すべての選択肢にバランス良く分布している。1～5年の初心者層が30%、6～15年が16%、16～30年と31年以上が27%となっていた。特にシニア層の多さから、16年以上も継続している人が半数以上見られた。

#### 4. 結論

2つのモデルスキー場を対象に研究を進めていった結果、様々な課題や強みが見えてきた。まず、目的の1つに挙げていた、スキー・スノーボードの実施割合については、先行研究にもあったように、その差はなくなってきたことが判明した。特に若年層は新たにスノーボードを始める場合が多く、今後、スキーとスノーボード実施者の割合は逆転するのではないかと。そして、なぜスノースポーツ実施者が減少しているのかについては、やはり少子高齢化は1番の影響であると思うが、その他にも、多くの娯楽が登場し、若年層を中心に、スキー場に行くことを選択しなくなっている現状がある。また、インタビュー調査では、スターの必要性についても聞かれた。例として、フィギュアスケートが挙げられる。トリノ五輪以前まではほとんどメディアに取り上げられなかったが、荒川静香さんの登場を機に、メディア露出が増え、次々にスター選手が誕生している。現在で言えば、浅田選手や羽生選手などが挙げられる。スキーについても長野五輪などで注目されたが、一過性のものとなってしまい、後が続いていかない現状がある。また近年でこそ割合が増えたスノーボーダーに関しても、車山高原スキー場の運営者は頭打ちになってきたことを感じているという。このような現状では、利用客の増加のためには、やはりスター選手の登場は必要な要素となってくるだろう。

そして、利用客のニーズについては、結果にもあるようにリフト料金の安さは、スキー場を決めるうえで大きな決定事項になっているだろう。特に今後、将来的に需要が期待できる若年層に対しては、力を入れる必要があるだろう。現在の雪マジは19歳及び20歳向けの商品であり、21歳や22歳に向けても、各々のスキー場が工夫を打ち出していくことが必要であると考えられる。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究では、長野県内の2つのスキー場を対象を絞り、研究を進めたが、今後はより多くのスキー場の現状を知っていきたいと感じた。スキー産業は右肩下がりが少しずつ回復基調にあると分かり、スキー場へ行くことが好きな私にとっても嬉しい結果となった。

今度からスキー場を利用する際には、運営状況や利用者の客層など、いろいろなことを気にしながらスノースポーツを楽しんでいきたい。協力していただいた車山高原スキー場とMt.乗鞍スノーリゾートには感謝したい。スキー産業が右肩上がりになり、発展していくことを期待する。